

曾我 英子 (Soga Eiko)

2021年度奨学生

オックスフォード大学 芸術学部 博士課程

2021年半期は北海道様似(さまに)町で「様似アイヌ料理:自然と人間社会の共感」を主題として、研究を行いました。世界が直面する自然環境問題を抱えた現代で、人が人間らしく自然と調和をとるということはどういったことなのかを問いました。この問い合わせるために、四季折々の様似アイヌ料理をアイヌ女性の熊谷カネさんから学ぶことに着目し、一年に渡り実地調査を行いました。伝統的なアイヌの食は料理だけではなく、食材となる山菜、陸、海、空の生物がどのように自然の中で生きているのかという理解や、自然を循環させ続ける知識と経験が大切であることを深く学ぶことができました。さらに自然と人間の共生は、目の前にいる生物に対する感謝と謙虚な心が重要だと、日々の活動の中で体感を通して感じ取ることができたのは、研究結果に繋がると確信できました。さらに、近代化した日本社会が発展して得たものと、逆に取り戻すべき事柄を発見しました。例えば、読み書きを通して知識を得たり表現することが当たり前の社会で育った人々が、もともと書く文字を持っていなかった先住民族の文化をどのように理解をできるのでしょうか？人はもちろんのこと、動物や植物への理解に対しても同じことが言えると思います。アイヌの口承文化は、語りや歌を通して知識を共有し持続していました。音声言語を巧みに使うことで発達してきた文化の世界観は根本的に日本近代文化と異なります。根本的に、そのような違いがある中で、欧米文化の影響を受けてきた現代の日本の価値観がどのようにアイヌ文化との共存

ができるのでしょうか？実地調査を通して、現代と未来の絆が一層深まるために必要な価値観や文化を写真、映像と文字を使って記録しました。



▲ 様似町風景

様似での実地調査後イギリスに戻り、様似町での発見をアートの技法でまとめる作業を始めました。新しい知識の作り方や表現方法を模索しているところです。自然の生き物と人々の相互的な関係と社会作りはアイヌの人々だけでなく、地球上の人類共通の課題です。そのために、日本が近代化やグローバル化するために排除してきた文化や観念を学びました。それらは、マイノリティーに対する社会の差別化や偏見から、匂いや感情といった個人が感じる要素まで広く渡ります。社会が多様性を受け入れ、動物や植物を含め全ての生き物が公平に行きることの出来る社会とは

どのような形なのか、研究仲間や大学の教授たちと議論を交わしています。そのような活動を通して、自然環境問題にアイヌ文化を含め日本が自発的に世界に発信できる英知を具現化するために、研究をまとめています。

以上



▲熊谷力ネさんと海藻採り